

# シマアオジ札幌シンポジウム



## プログラム

### 挨拶

- ・ 環境省北海道地方環境事務所  
野生生物課 課長 田口和哉

### 講演

- ・ 北海道のシマアオジの減少と今後の保全  
玉田克巳 (地方独立行政法人北海道立総合研究機構環境・地質研究本部  
環境科学研究センター自然環境部生態系保全グループ主査)
- ・ サロベツのシマアオジの減少と最新状況  
長谷部真 (サロベツ・エコ・ネットワーク)
- ・ 海外のシマアオジの状況と国際的な保全  
シンバ・チャン (パートナー・インターナショナル)

### 対談

- シマアオジ保全に向けて  
・ シンバ・チャン 玉田克巳 長谷部真  
司会進行 長谷川理 (NPO法人EnVision環境保全事務所)

2017年

会場: 北海道大学総合博物館 1階知の交流ホール

札幌市北区北10条西8丁目 札幌駅より徒歩15分 北12条駅より徒歩10分

11月26日 日 14:00-16:00 申込・参加費  
不要

主催 : 環境省北海道地方環境事務所

主管 : NPO法人サロベツ・エコ・ネットワーク

連絡先 : 0162-82-3950 info@sarobetsu.or.jp

協力 : 北海道野鳥愛護会

日本野鳥の会札幌支部

NPO法人EnVision環境保全事務所

## 講演要旨

### 北海道のシマアオジの減少と今後の保全

玉 田 克 巳

(地方独立行政法人北海道立総合研究機構環境・地質研究本部  
環境科学研究センター自然環境部生態系保全グループ主査)

本年(2017年)9月、シマアオジが種の保存法に基づく国内希少野生動植物種に指定されました。国のレッドリストで絶滅危惧 IA 類に選定されたのが2007年なので、絶滅危惧種に選ばれてから法指定まで、実に、10年が経過しています。一部で「指定が遅かったのではないか」という批判があります。本当に遅かったのでしょうか？

過去の野鳥情報などを集計してみると、減少は1990年代前半から始まったことがわかります。しかし、減少実態が明らかになるのは、根室市春国岱の事例報告があったのが1997年、北海道全体での減少実態が見えてきたのが、2000年代の中頃です。

減少の原因は、中国で食べられているからだとする仮説があります。1992年に中国南部の三水市でシマアオジを食べるお祭りが始まります。お祭りは5年で中止されますが、その後も闇市場が横行しているようです。お祭りの存在自体は、道内でも1997年に新聞報道されています。お祭りが始まった時期と、北海道にシマアオジが減少した時期は一致します。しかし、これで北海道のシマアオジの減少の原因が中国での捕獲であると結論つけることはできません。シマアオジの繁殖地は北海道だけではなく、ロシアのカムチャツカ半島などの極東地域から、ヨーロッパまで、ユーラシア大陸の北側に広がっています。中国南部でシマアオジが捕獲されたとしても、その捕獲個体が、北海道から渡った個体であるかどうか、よくわかりません。世界の繁殖地でシマアオジが減っているという情報が明らかになってくるのは2015年にKampの論文が公表されてからです。数理モデルの分析によって、中国での捕獲が、世界的なシマアオジの減少をもっともよく説明できるという論文です。

さて、シマアオジは国内希少野生動植物種に指定されました。しかし、今後、保護増殖計画を立てられるのかどうかは、まだはっきりしていません。計画を立てるにしても、どんな計画を立てることができるのか。効果的な対策は思い浮かばず、悩ましい限りです。過去に保護増殖計画を立てられているほかの種を見ると、ほとんどが留鳥です。長距離の渡りをする小鳥を対象とした保護増殖計画を立てるということは、新しい挑戦になります。ただ2010年に名古屋で開催されたCOP10では、2020年までに、生物多様性の損失を止めるために、実効的かつ緊急の行動を起こすことを目標に掲げています。保全対策については、まだ先が見えてきませんが、シマアオジの保全に向けた議論をはじめることが、COP10で日本が世界と交わした約束を守ることに繋がっていくものと思います。

## サロベツのシマアオジの減少と最新状況

長谷部真（NPO 法人サロベツ・エコ・ネットワーク）

かつてのサロベツ湿原にはシマアオジがたくさん生息し、1970年に湿原で行われた調査では優占種になっていました。昔の状況に詳しい方の話によると、シマアオジは湿原だけでなく、牧草地周辺、海岸草原、河川敷などにも普通に生息していたそうです。それが1990年代頃から次第に少なくなり、2000年代になるとシマアオジの姿が確認できるのは湿原だけになりました。2010年代になると湿原の中でも生息範囲がさらに狭くなり、今やサロベツ湿原センターの木道とその周辺でしか、シマアオジは確認されていません。シマアオジは日本でサロベツにしかいないと言っても、サロベツですらもはや危機的な状況です。国立公園施設の旧サロベツビジターセンターがサロベツ湿原センターに移転した時に、設置された新たな木道周辺が、偶然にも日本に残されたシマアオジの最後の繁殖地の一つでした。現在、旧ビジターセンターの周辺ではシマアオジの姿を確認することはできません。サロベツ湿原センター木道を散策する際には、シマアオジの繁殖期である5月下旬から7月までは、最大限の配慮をお願いします。

2017年は環境省の請負業務により、私たちはサロベツでシマアオジの生息が確認されている場所での繁殖状況調査とシマアオジの生息可能性がある場所を踏査する生息確認調査を行いました。調査の結果、雄のさえずり場所（ソングポストや鳴き声が聞こえた場所）の数から、サロベツ湿原センター木道で4つがい、別の繁殖地で17つがいの生息を推定しました。サロベツ湿原センター木道では雌・巣材運び・幼鳥が、別の繁殖地でも、雌・巣材運び・餌運びが確認されましたので、雄がさえずっているだけでなく、実際に繁殖し、成功していることが明らかになりました。生息確認調査では4地域で調査を行った結果、シマアオジが確認されたのは1地域だけでしたが、ここではさえずり場所の数から10つがいの生息を推定しました。

調査結果を合わせると全部で31つがいの生息を推定しました。サロベツ湿原センター木道の推定つがい数は前年と同様でしたが、「別の繁殖地」のつがい数は詳細な調査を行ったことにより、想定していたよりも大きな繁殖地であることがわかり、新たな繁殖地も発見されました。それでも、現在サロベツでシマアオジの生息が確認されている場所はサロベツ湿原センターの周辺に限られているため、危機的状況に変わりはありません。

「別の繁殖地」で想定よりも多くのつがい確認されたので、今後の保全対策として、ここを拠点に繁殖地を拡大することが望まれます。残念なことに、この繁殖地の拡大には湿原の乾燥化に伴って形成されたと考えられている隣接しているササ群落が障害になっています。今後のサロベツにおける保全対策の一つとして、シマアオジが現在繁殖している湿原の環境を増やすことが挙げられます。

加えて、ここ数年シマアオジの姿が確認されていなかった場所で、2017年に再び姿が確認されました。ここは未開発のまま残された民有地なので、ナショナルトラスト運動などにより土地を購入し、保全することも考えられます。また、これまで北海道各地のシマアオジが生息していた場所にシマアオジが戻って来た時に備えて、生息確認調査やその情報共有を行い、シマアオジ保全活動を行うための全道規模のネットワークを作ることにも必要と考えられます。

## 海外のシマアオジの状況と国際的な保全

シンバ・チャン（バードライフ・インターナショナル）

2016年11月、中国の広州でシマアオジ保全に関する国際ワークショップが開催されました（広州はシマアオジ消費の中心地でした）。シマアオジが分布している全ての東アジア関係諸国が参加すると共に、南アジアの関係国にはアンケートが送付され、全ての国から、シマアオジが大幅に減少しているとの報告がありました。例えば、タイではバードウォッチングの記録が信頼できる文書として残されていますが、1984年にはタイ北東部だけで4万羽が観察されていたものが、現在では毎年数百羽が見られるにすぎません。ロシアでは、1980年代中頃まで、ロシア最西部のカーリングラードで観察記録がありましたが、現在ではヨーロッパロシアからほぼ消失しています。

現段階では、シマアオジは分布域の多くの国々で公的な保護の対象となっておらず、中国だけでなく東南アジア各国でも狩猟が問題となっています。

2016年以来、バードライフはバースロシアと共にサハリンでシマアオジの調査を行ってきました。その結果、シマアオジの生息地はサハリン南部では消失し、サハリン西部のごく限られた地域と、北部でのみ生存していることが明らかになりました。2017年の調査では、シマアオジを捕獲してカラーリングを装着し、サハリンと北海道の個体群の遺伝的比較を行うためにDNAサンプルを採取しました。近年、ロシアのアムール地域で行われたカラーリングを用いた調査によって、シマアオジは正確に同じ繁殖地に戻ってくることが知られており、2018年の調査ではサハリンの個体にジオロケーターを装着し、渡りルートを明らかにしたいと考えています（恐らく、北海道の個体群に非常に近いルートと思われます）。

一方、中国は2017年に野生生物保護法を改定し、シマアオジの消費そのものを違法とすることを発表しました。法執行の強化を支援するため、私達は中国の野鳥観察諸団体にこのメッセージの周知を促しています。2018年からは、シマアオジの現状について、東南アジアにおいても調査を進める予定です。これらの活動によって、アジア地域にシマアオジを含めた小型の渡り性スズメ目鳥類の減少についての問題が、より広く知られるよう期待しています。

現在、シマアオジ関係者のネットワークが形成されつつあり、カラー・バンディングで連携が始まっています（現段階で、ロシア、モンゴル、香港）。国際的な協力が進むことで、シマアオジを筆頭に、アジアで小型の渡り鳥保全が強化されるものと信じています。



カラーリングを装着したシマアオジ（香港、10月）



香港、中国南部向けリーフレット